並行世界のソレミニ

秋ノ君

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

並行世界のソレミニ

【Nコード】

N8943X

【作者名】

秋ノ君

【あらすじ】

何気ない日常を過ごしていた佐照杏^{さてる きょう}。日常に不満があるわけではないが、ここではない夢物語の世界に憧れを抱く。それは誰もが幼き頃に抱いた感情。御伽話やアニメ世界への憧れ。

21歳の秋。突然の出来事により、生まれた世界を旅立つ。地球と並行に存在する世界で見つかる己の思い。その思いを成し遂げるために繰り広げられる仲間たちとの物語。

プロローグ（前書き）

この度、連載を始めました。若輩者ですが、良いものを書くために日々努力したいと思えます。出来る限り良いものをお届けするために、更新は時間がかかると思えます。

最後になりますが、この作品に興味を持って頂き、誠にありがとうございます。皆様の閲覧が私の血となり肉となります。これからも何卒ご愛好よろしく願います。

プロローグ

世界。その定義は曖昧でだが、確かに感じる事ができる事象。

人々は己が暮らす空間を世界と呼び、その空間の中で喜び、幸せなどの様々な感情を抱く。人々は集まり、国という世界を作る。営利目的に人々は集まり、会社という世界を作る。はたまた、他人を好きになり、恋に落ち、家族という世界を作る。世界は多様に姿形を変え、並行に存在している。しかし、人々は世界に侵入するものを嫌悪し、恐怖を抱き、戦いを始める。どの世界であろうと変わりはしない。悲しい『世界』の性質。

その『世界』の悲しい性質を憂い、悲しむ者がある。その者は異端と呼ばれ、多くの人々に蔑まれた。それでも、『世界』のために戦い続け、戦いの末に命を落とした。

近い様な遠い世界の話。あなたの世界の隣で繰り広げられる世界の話。

第1話

ドアをゆっくりと開く。ドアの隙間から差し込む光に眼を細める。吹き込む風が喉を通り抜け、全身の細胞一つ一つの活動を鈍くする。体を巡った空気は白い水蒸気となり、再び空に戻っていく。

「冬もすぐそこまでやってきているな」

70度くらいは角度のありそうな急な階段を降りていく。カッソ、カッソ と靴の音が澄んだ空気に響く。雪が積もると、この階段は天然のスケート場に変わり、毎年何人も悲鳴を生む。

ここは日本のとある街。俺は大学に通い、家賃3万3千円の7畳ロフト付のアパートで暮らしている。特に取り柄があるわけではないが、全ての事に対して上の下ほどの成績を残してきた。比較的に来る人として、周囲の人達からは頼られる機会も多い。

家を出ると周りには多くのアパートが立ち並ぶ。綺麗で洋風のお洒落な建物もあれば、いかにも幽霊が出そうな寮など様々な品揃えだ。坂道を下るとそこには集会場があつて、週末には良く地域の子供たちが集まつて、懐かしい遊びをしている。

いつもと変わらない通学路。いつも聞いている音楽を口遊み、くちあそび アスファルトで固められ道を歩く。ここが小説の世界もしくはゲームの世界ならば、いきなり次元のゆがみに捕らわれ、別世界に飛ばされる可能性もはないだろう。

そんな非現実はないと知りつつも、思いは膨張する。その世界の郷に従って暮らしていくのは、どの様な気持ちなのだろうか。きっと、友人や家族のいない世界で生きていくのはとても辛いだろう。それにもかかわらず、物語の主人公とはたくましいもので、まっ。どうにかなるか。こんな感じで何の抵抗もなく、その世界に溶け込んでいく。その世界自体に現実味がないのだが、その非現実的な

世界に憧れを抱く。

信号が赤に変わり、空を見上げ途方もない考えを巡らせる。学校、友人、好きな女の子、将来の夢。遠い未来に思いを馳せる。信号が赤から青に変わり、歩み始める。その瞬間、世界が反転して体の重力を失った。

「見つけた」

どこから聞こえたか正確に判断できない一言とともに、意識が闇に包まれていった。

在りはしないと信じていた非日常。刻々と俺の日常は終わりを迎えていた。

目の前が明るくなった。見渡せばさっきまでのアスファルトに囲まれた光景とは一遍し、緑に囲まれていた。森ではなく樹海というのが正しいのだろうか。木には幾重にも蔦が巻かれ、その隙間から樹皮がこちらを覗く様に顔をのぞかせている。地面には真紅の花を咲かせた植物や見たことのない緑葉植物で覆い尽くされていた。

「そんなアニメや小説の主人公でもあるまいし、そんなわけないよな」

あまりの出来事に頬をつまむが、痛みを感じた。実際に頬をつねる場面なんてあるのだな と感嘆してしまった。

「あら。その考えはあながち間違いではないと思いますわ」

その柔らかな声に驚き、瞬時に後ろを振り向く。そもそもこんな森の中に人が居るのか疑問に思ってしまった。

「そんな恐い顔をして、こちらを見ないでくださいますか」

上品な顔立ちに腰まである金色の髪。白いワンピースに身を包んだ女性が凛と立っていた。処々に施された金刺繍が高貴さをより表現している。初対面の印象は素直に美人と思えた。しかし、一般的

なヒトとは違う点があった。

「その耳の形。君は人間なのか」

彼女の耳は横に細く尚且つ先端が尖っていたのだ。

「私は人間ではありませんわ。私はエルフですの」

「エルフ？あの童話や仮想世界で出てくるエルフだって!？」

驚愕の事実には腰を抜かしそうになった。確かに耳を見た瞬間、にわかにはそうではないかと感じたが、その現実を受け入れたくなかった。普段と変わらない日常だったはずが、急に目の前に、エルフですと言う人がいて、はいそうですね と返せる可能性はゼロに近い。しかし、その現実逃避も束の間だった。

「あなたが想像している通りのエルフですよ」

満面の笑みでそう言った。なぜそんな屈託のない笑顔を向けてくるかわからなかった。俺の心情は無視され、更に言葉がこぼれる。それよりもこちらの心が読めるのか。

「ちなみに、あなたをこの世界に呼んだのは私ですわ」

静かな森にその言葉が染み渡っていく。静寂が二人の間を支配したが、恐る恐る口を開く。

「なぜ、俺をこの世界に呼んだ？」

「なぜって言われましても。あなたは元々はこの世界の住人だったのですが、やはり覚えてらっしゃらないですか」

再び考えていた回答とは違う答えだった。真逆というよりは的を射てないとさえ感じた。だが、その女性は真剣な面持ちで思案していた。

「パラレルワールドってご存知かしら。世界は決して一つではないのです。様々な世界が並行的に存在していますが、ただ行き来や存在を直接確認できませんので、一般的には認知されていませんわ」

「パラレルワールドは知っている。物理法則的には存在し、俺はその存在を信じていた」

実際に信じている。現実の中で非現実には憧れを抱く青年には、いい現実逃避の題材でもあった。一時は、大学や国の図書館に足繁く

通い、一連の本を耽読した。俺の言葉を聞くなり、女性の顔は明るくなった。

「それなら話は早いのです。この世界は、ファフニール。あなたが以前暮らしていた世界は、地球と呼ばれていますわ」

彼女は続けた。

「先程申しましたように、僭越ながら私がこの世界にあなたを呼ばせて頂きました。申し遅れましたが、私の名前は、アイ・カムエル。アイとお呼びになってくださいまし。えっと……」

そこで言葉が詰まり首をかしげた。どこの世界でも悩み方は変わらない。アイは両腕を組み片手を頬に当て、うーんと唸っている。暗い顔に花が咲いた。

「そういえば、お名前を伺っていませんでしたの。お聞きしてもよろしいでしょうか？」

そういえば自己紹介もしていない事に気付く。己の動揺と混乱を実感し、少し気恥ずかしくなった。おそらく、誰であるかと、このよう非日常な状況に遭遇すれば同じはずなのだが。

「俺の名前は、佐照 杏」

これが彼女との出会いだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8943x/>

並行世界のソレミニ

2011年10月26日14時08分発行